

令和5年度 学校自己評価表				鳥取県立倉吉農業高等学校			
中長期目標 (学校ビジョン)		農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切に して知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るととも に、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人の育成を目指します。		今年度の 重点目標		1 各科の特色を活かした新たな魅力づくり 2 地域に貢献できる専門人材育成 3 生徒の主体的な学びの推進 4 生徒募集・定員の充足	
年 度 当 初				評 価 結 果 (中 間)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1	各科の特色を活かした新たな魅力づくり	各科の特色作り	・生物科は魅力事業として、乗馬交流やB&Wショーへの参加、青パパイヤプロジェクト、梨の枝利用技術など特色ある農業技術の発展に貢献できるよう研究を行っている。 ・食品科は農畜産・農産加工品の製品づくりを通して、食物の有効利用や新商品開発(パン製造)に取り組んでいる。また、白米やもち米栽培ではスマート農業の導入の研究も始めている。特に全国お米甲子園に参加し、審査を受けることで栽培の検証にも力を入れている。 ・環境科は地域のニーズに答え、土木業界や森林関連産業、JR倉吉駅、近隣小中学校などに出かけ環境整備を中心とした地域貢献事業を実施している。	・各科農業科目の基礎、基本を重視した体験的学習の展開を行うとともに、園場や飼育動物、農畜産物の加工、環境整備を教材として実践的かつ専門的な学習を体系的に学び、学習内容を地域社会に貢献できるよう実践的な交流へとつなげることができる。 ・最終学年では、課題研究で成果を発表できるよう取組を推進するとともに、多くの方に学んだ成果を情報発信し、自己肯定感や達成感につなげることができる。	・各学科に共通して、生徒につけさせたい力や育てたい姿を明確に示し、主体的に行動できる学習環境や教材づくりを心掛ける。今年度より、総合実習の記録は、タブレットを活用して、写真や数値の集積を行うなどICT活用を進める。また、中学生や保護者、地域のニーズを把握しながら本校生徒や中学生が魅力を感じる取り組みを進める。 ・外部関係機関の連携を引き続きおこなう。	B	・校内外での学習において、参加する高校生が目的をを持って学習に参加できるよう配慮した。また、より多くの地域の方に参加していただきながら、地域貢献できる交流ができた。 ・外部報道機関との連携を図り、近隣の幼・保から高齢者まで幅広く交流し、自分たちの学習を伝えることができた。
		地域との連携・発信	・生物科は青パパイヤ、梨の栽培や梨枝研究で外部機関と連携を行い、綿密な計画のもと、調査を行い科学的に分析し、その成果を地域に還元する。 ・各科の学習内容を地域の方に知ってもらうための体験入学や交流学習を行い、コミュニケーション力を養い、社会に貢献できる人材の育成につなげる。	・外部関係機関との連携を図り、より専門的な分析や研究資料に対する助言をいただき、各種発表会へつなげる。また、関連企業に出掛けていき、会社の様子を感じることで、卒業後の進路開拓や実現に繋げる。	・3学科とも地域の農業課題に取り組む、課題解決のための学習活動に参加できている。生物科は生産した青パパイヤの販売実習・調理方法の研究・梨枝の利用について、新たな研究に挑戦する研究を行った。食品科は、県内外での販売イベントを通して本校の加工品などを紹介できた。環境科は倉吉駅前花壇の整備をはじめ様々な研修会・大会に参加し、学習している内容をより多くの方に紹介した。 ・体験入学では112名参加、秋季オープンスクールでは49名の参加があり中学生・保護者に本校の魅力を発信した。	B	・各学科とも継続して取り組んでいるテーマについて研究を行い、地域課題に答えられるよう数値データの分析やアンケートなど幅広く意見を聞き、学年末の発表や研究集録にまとめられるようにする。
2	地域に貢献できる専門人材育成	農業後継者の育成	・スーパー農林水産業士の6期生5名が認定され、2年生4名が令和5年度の認定を目指している。認定者のうち、3名は鳥取県農業大学校に進学し、将来の就農者としての学習の積み上げを行っている。 ・農業関連の進学・就職割合(41%、27名/66名)で昨年並みであった。(R3:42.2%、35名/83名) ・就農促進研修会に20名の参加、そして、初めて開催した中国四国農政局鳥取拠点との共催シンポジウム(鳥取を耕す理由を教えてくださいin倉農)に54名の参加、農業クラブ主催の農業後継者の集い11名、農業教育会主催の農業先進地研修に1名の参加があった。	・スーパー農業水産業士7期生が4名以上誕生し、鳥取県の農林業を支える人材が育っている。 ・スーパー農林水産業士のしくみ、利点や、各学科の取組を今まで以上に県内外の中学校へ情報発信することで入学希望者数の充足率が上がる。 ・各種研修会では生徒が積極的に参加した結果、農業関連への就職・進学が45%となる。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させる。 ・進路及び学年と協力し4年生大学・農業大学校への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。 ・中国四国農政局、農業大学校、農家での就業体験を通して、農業担い手人材確保に繋げる。 ・農業に関係する研修や就業体験など担い手育成に関する研修の場を広報し積極的な参加を促す。	C	・スーパー農林水産業士の認定は4名であった。 ・就農促進研修会に18名が参加し、これから進路を考えようとするタイミングで生徒は現場の声を直接聴くことが出来、興味関心を抱くことが出来た。
		インターンシップ・高大連携の充実	・鳥取大学農学部、公立鳥取環境大学見学会を1、2年生希望者に行い大学で学ぶ意義を知り進路実現の一助としている。R4年度参加者:鳥大11名(1年生3名、2年生8名) 環境大14名(1年生4名、2年生10名) ・高校生と大学をつなげる事業「つながるパネル展」開催、高大連携事業「大学進学研修プログラム」に進学希望者参加。R4年度参加者:鳥取大学農学部1名、公立鳥取環境大学1名。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムの長期インターンシップは10名の生徒が実施した。 ・3年ぶりに県外先進地研修(畜産部門に3名、園芸部門に1名)に参加し、全校生徒に向けてリモート形式で報告した。	・大学進学を志す生徒を増やし、鳥取大学農学部進学者1名以上に、公立鳥取環境大学進学者1名以上を目指す。また、2年生インターンシップを実施し、就労意欲の向上や進路選択の大きな一助につなげる。 ・長期インターンシップに参加する生徒が10名を超え、より実践的な農業体験を経験することにより、農業後継者としての意識や態度が身に付いている。また、関係機関と連携し、長期インターンシップ、県外先進地研修を成功させる。	・鳥取大学農学部、公立鳥取環境大学等との高大連携を継続するとともに、生徒の主体的な事前準備・学習等を充実させ、事後の振り返りから具体的進路実現につなげる。 ・早期にインターンシップ委員会を開催し、地域の関連団体との連携も取りながら、生徒の進路希望に沿った体験先、教育課程に関係したインターンシップ先を候補に企業選択を行い、卒業後の進路に繋げる。 ・長期インターンシップは鳥取県農林水産部と連携し計画していく。	C	・鳥取大学農学部見学会を10月に実施。例年以上の生徒が参加し積極的に質問するなど意欲的な姿が多く見られた。また、新たに大学進学に関心を示す生徒が現れ主体的な進路選択の雰囲気が広がっている。 ・2年生はインターンシップを4日間行い、各科に関連した企業での職場体験ができた。生物科は16社、食品科は15社、環境科は6社の企業に協力をしていたが、今後の進路選択に繋がる体験となった。 ・長期インターンシップの参加は9名であった。
		資格取得の推進	・FFJ級位検定の合格者は、初級位65名、中級位(2年生のみ)12名、上級位8名となっており、2年生の中級位受検者の減少及び合格者数が大きく低下している。 ・令和4年度の各種資格検定の合格者数延べ人数は219名(在籍生徒数対比、一人当たりの取得数1.0)であった。 ・令和4年度のアグリマイスター顕彰制度認定者はプラチナ0名、ゴールド4名、シルバー3名であった。(R3:2名、2名、3名)	・FFJ級位検定合格率が初級60%以上、中級40%以上、上級位検定合格者数は25名以上、合格率85%以上。 ・各種資格検定の合格者数が延300名以上。 ・アグリマイスター顕彰制度申請(プラチナ認定)者、農業技術検定2級、測量士補、危険物取扱者乙4種など難易度の高い資格取得者が昨年以上。	・FFJ級位検定の意義や学習方法等の説明をとおして生徒のモチベーションを高める努力を続け、普通科教員も含め教員が一丸となり指導する。 ・資格・検定の情報を積極的に案内することで受検者を増やし、資格取得の有利性を説明し、主体的に学習させる。 ・難易度の高い資格に足しては外部指導者の活用や課外活動などを実施する。	C	・アグリマイスター前期認定者は4名であった。 ・難易度のある資格で日本農業技術検定2級1名、測量士補1名、技能検定2級2名、危険物乙4類試験1名であった。
3	生徒の主体的な学びの推進	協同学習の推進と授業改革	・昨年度は協同学習テーマとした研修会や公開授業ができなかったが、各教科、科目で協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。 ・ICTの全体の研修会を各学期1回(合計3回)実施した。これによりグーグルアプリを活用できる教員が増え、授業で活用されている。 ・R4年度入学生の教科の新しい3つの観点別評価について評価方法を検討し、本校の評価基準等に沿って各教科で授業評価が行われた。 ・1年生を対象にクロームブックの活用状況の調査を行った。全体の9割以上の生徒がクロームブックが授業や自分の学習に役立っていると回答した。	・全ての教科・科目でICTや協同学習の理論を取入れた分かりやすい授業を実践している。 ・生徒が積極的にICTを活用し、生徒の学習意欲と学力が向上する。 ・各教科ごとの評価表をもとに観点別評価を行い、生徒の学力向上につなげる。	・協同学習をテーマとした公開授業を全員が行うために研修会を実施する。 ・誰もがICTを活用した授業を実践するために、ICT研修を学期に1回実施し指導力の向上をはかる。Chromebook授業活用が積極的に行われるようにICT活用推進委員会で計画し実践する。	C	・岡山大学の高旗浩志教授主催の協同学習研究会(8月、9月)に希望者がリモートで参加し、協同学習についての研修を行った。倉吉市立西中学校での協同学習研究授業には5名参加し、授業参観および研修を行った。 ・ICT研修については5月、6月に実施し、GoogleWorkspaceなどを有効活用し、授業力の向上に努めている。 ・ICT活用委員会を6月および9月に開催し、業務改善に取り組んでいるが、chromebookの授業活用においては課題が残る。
		生徒会活動と部活動の活性化	・生徒会活動は、執行部、農業クラブを中心に自主性が育ち始めているが、生徒が主体となって企画・運営する活動が少ない。また、年間を通して活動している部活動に限られている。 ・農業クラブ活動では、放課後を中心に取り組んでいる。特に乗馬セラビー同好会は馬とのかわりの中で動物に親しみをもてる機会となっている。 ・農業クラブ員としての活動で、農業自営者養成研修や農業クラブ指導者研修会に出掛け、他校との交流を行い農業クラブ活動のあり方について意見交換を行っている。	・生徒会執行部の主体的な活動を通して、全校生徒が生徒会活動の意義を認識し、生徒会活動に積極的に参加できる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系体育系農業クラブを合わせて4部以上となる。 ・他者との交流により、コミュニケーション力を養い、意見交換を通して、指導性を養うことができる。	・生徒会室を設置することで、生徒会、農業クラブの活動を活性化させ、活発な意見交換の場とする。 ・生徒総会、農業クラブ総会、表彰式、壮行会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。また、できる限り顧問の積極的な部活動へ参加できるように校内で取り組む。 ・農業クラブ活動への参加を促し、各種交流事業など実践的な体験に多数参加させる。	C	・生徒会室の設置はまだである。生徒会執行部では生徒会行事において積極的に活動しており成果を挙げている。 ・部活動では本年度もインターハイに出場した(アーチェリー部)。全体的な活動としては、継続的に参加する生徒を増やす必要がある。 ・農業クラブにおいては、県・中国大会の意見発表会、プロジェクト発表会で優秀な成績を収めた。また、全国大会では家畜審査競技和牛の部で優秀賞を収めることができた。
		地域交流・地域防災の推進	・近隣中学校、小学校に出掛けたり、来校していただき、日頃取り組んでいる学習成果を披露する場面を設定できている。また、外部団体との連携は継続して実施している。 ・防災かまどや避難所開設により、防災に関する意識を高め、危機管理に対する意識の向上につなげた学習に取り組んでいる。	・異世代との地域交流を通して、コミュニケーション力を養い、協定して取り組むことや自ら発信することで自己肯定感を育む事ができる。また、学習で身につけた内容を、指導する側として実践力を養い、社会に出てリーダーとなりうる人材育成につなげる。	・新型コロナ感染症も5類へ移行したため、交流を再開し、今まで以上に積極的に行う。 ・昨年度の中部フォーラム参加をきっかけに、地域住民からの要請があり、今年度は防災かまどの設置を進めることとなった。生徒が主体的に協力ができるよう指導する。	B	・環境科土木専攻では昨年度取り組んだ防災に関する研究を継続できた。そのことにより、地域コミュニティ(瀬手地区)で防災かまどの設置に向けて、自治体・住民(小・中学生から大人まで)・高校が連携し、災害時の対応についての学習を行うことが出来た。

令和5年度 学校自己評価表									
中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切に して知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るととも に、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人の育成を目指します。			今年度の 重点目標	1 各科の特色を活かした新たな魅力づくり 2 地域に貢献できる専門人材育成 3 生徒の主体的な学びの推進 4 生徒募集・定員の充足			鳥取県立倉吉農業高等学校	

年 度 当 初					評 価 結 果 （ 中 間 ）			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策	
3	寮教育の充実	・新型コロナウイルス感染症対策として、寮行事の精選や日課および規則の見直しをすることで、寮全体で感染予防対策をとっている。 ・日課に自習時間を設けているが、目に見えた成績の向上に実感が持てず、学習に対して自信を持ってない生徒がいる。 ・年間3回寮講演会をもち、コミュニケーション力の向上、農業及び関係業種への進路実現、救急救命法について学んでいる。 ・寮生サミットでは、令和2年度は中止、令和3・4年度はリモート開催となり、十分な成果が上がっていない。	・新型コロナウイルス感染症対策に係る新たな方針のもと、場面に応じたマスクの着脱を実践し、健康に寮生活を送っている。 ・朝学習テストの成績が毎回65点以上になることをきっかけに、日頃の学習や進路実現に意欲的に取り組んでいる。 ・講演会後のアンケートで、内容の理解および満足度が3以上(5段階評価)と感じている生徒が60%いる。 ・(寮生サミットでは)各校の寮生から刺激を受け、寮生会が中心となって課題解決に向けた行動がとれるようになる。 ・令和5年度第59回全国農業経営者育成高等学校研究協議大会が、参加校にとって有意義なものとなる。	・現行の感染症対策をもとに、食堂での行事や密となる施設内でのマスク着用について、新たな基準を設ける。 ・朝学習テストの範囲に合わせた課題に繰り返し取り組ませる。得点が伸び悩む生徒に対し、学習方法の見直しや解答への道筋を指導する。 ・講演の中に協同学習の要素や体験を取り入れ、より内容の理解が深まるよう講師に依頼する。 ・寮生サミットでは参加校と情報を交換することで、本校寮との違いを知る。 ・第59回全農研では寮、農場だけでなく、学校全体で役割を分担し、より充実した大会運営を行う。	・食堂への入退室は手指消毒を行い、食事中は黙食としている。 ・1学期の基礎学力テストの成績は、1年生81点、2年生72点、3年生72点で、平均65点を大きく上回っている。しかし毎回65点以上を達成できない生徒は、1年生5人、2年生8人、3年生6人いた。該当生徒の多くは、一般教養において達成できない傾向にある。 ・6/8に鳥取県スクールカウンセラーで臨床心理士小嶋和重先生の講演会が開催された。 ・寮生サミットにおいて、寮生会活動の活性化について議論し、他校の寮から刺激を受けた。 ・第59回全農研では、校内の組織的な役割分担のもと円滑な大会運営ができた。	B	・週番の役割の中に手指消毒(確認)係を位置づける。 ・全学年、6月初旬の一般教養問題の得点がでない。県高校総体と振替休日中の寮課題を作成する。 ・1/17の本校OBによる講演会を充実させるため、事前に生徒が知りたい内容を講師に知らせる。 ・寮生会役員会の定例化を図る。 ・次期事務局に反省および改善点を引継ぐ。	
	生徒の主体的な学びの推進	進路意識の定着	・年間を通じて各学年進路ガイダンス等を行い希望進路ごとに主体的な進路探究を行っている。(職業観育成、社会人教育、求人票の見方、就職試験対策指導、大学短大企業ガイダンス等) ・朝学習、朝学習テスト、基礎力診断テストを年間を通じて全学年に行い系統立てて基礎学力向上に取り組んでいる。 ・少数であるが、進んで挨拶が出来ない生徒も見られる。また、2割弱の生徒は毎月の服装指導を受けている。	・3年生について、全員の好ましい進路実現。 ・1、2年生について、高校卒業時の希望進路が全員自分の言葉で語れる。 ・年度を通じて、1、2年生基礎力診断テスト結果においてD3生徒の減少。(D3:筆記試験を課す企業で不合格が多いレベル) ・全員が常に挨拶が出来、服装規定を守り、安定感のある学校生活を送る。服装改善の保護者文書発送を全生徒の10%にする。	・各進路ガイダンス等において、生徒の主体的な姿勢を導くき、進路面談を軸に校内連携を密に行いチーム倉農で指導にあたる。 ・公務員志望生徒について、公務員試験対策ゼミを開催。 ・基礎学力の向上に向けた各取組と通常授業との連携をとり、生徒の実態に即した教科指導を行う。 ・学校生活のあらゆる場面で挨拶の徹底、毎月の服装指導と事後指導を行い、各分掌との連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。また、保護者に対して丁寧な説明を行う。	・就職・進学希望生徒それぞれが進路実現に向け積極的に学習に取り組んでいる。 ・基礎学力診断テスト(8月回)において国数英3教科ともに基礎学力の向上がみられる(D3生徒の減少)。前回結果を受けて各教科で科会を行い日々の授業を中心に積極的な対策を行っている。 ・様々な場面での挨拶は実施されている。日々の服装指導の影響もあり保護者への服装改善文書は10月まで12.1通(最大26通・最少1通)で全校生の10%(18.5)を下回った。	C	・引き続き個別の進路指導を充実させていき、主体的な進路選択・実現を目指す。 ・8月回の診断テスト結果についても十分に分析・活用し、更なる基礎学力向上にむけチーム倉農で取り組む。
		倉農DXの活用による業務改善	・ICT研修会等によりGoogleアプリ等を活用できる教員が増つつある。 ・事務業務量が多く、勤務時間内に処理することが困難である。	・教員の指導により生徒が積極的にICTを活用し、生徒の学習意欲と学力が向上する。 ・DXを活用し担当業務の見える化を行い、業務改善を図る。効率化により時間外勤務10%減	・Chromebook授業活用が積極的に行われるように、教務部と連携し、授業実践の研修会や、研究授業を行う。 ・業務計画表、事務引継ぎDB、クラスルーム等を活用し、業務の見える化を行う。	・「倉農連絡シート」の使用を提言し、朝礼を効率化した。 ・今後は「きもちメーター」なども定着させ、業務の効率化を推進した。	B	職員研修会を行うことで、さらにスムーズに活用できるようにする。
4	生徒募集・定員の充足	学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化	・各分掌、各クラブによるWEBページへの掲載を呼びかけている。 ・PTA活動への参加者は、各行事、研修会等への参加者数は一定数ある。	・特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まっている。 ・教育支援部を中心に、各分掌や各々がWEBページを積極的に更新し、行事の様子など本校の活動が広く認知されている。 ・保護者等が積極的にPTA行事に参加している。	・特色ある取組をWEBページやSNSに投稿する。また、マスコミへ情報提供し地域へ積極的に発信する。 ・年間50回以上のWEBページ掲載を目標に取組み、実習や部活動の様子を担当者や部顧問がHPにアップするよう働きかける。 ・保護者への情報伝達手段として「まちcomiメール」を活用する。	B	・実習や部活動の様子について、WEBページ掲載に取り組んでいる。4月から61件(9月30日まで)と掲載数は目標を上回った。 ・PTA総会で学校の来場者は42人だった。 ・保護者への情報伝達として、「まちcomiメール」を活用している。	学園祭が終了し大きなイベントは終了したが、その他のイベントなどへの情報提供を行う。引き継ぎをスムーズにできるように進めていく。
		県内外生徒の募集の充実	・地域みらい留学の一環として、学校の紹介映像を作成し、県外の多くの方に知ってもらう機会を得た。 ・本校県外生徒に対して、県内の産業を見学したり、観光名所を訪れ鳥取の魅力について知ってもらう機会を設定し、生徒目線での中学生へ情報発信を行っている。 ・倉農の様々な取り組みが各種メディアで取り上げられ本校の魅力が認知されつつある。	・学校HPの更新を行い、学校での活動の様子がわかる。 ・地域みらい留学では、イベント参加者を200名を目標とする。また、受験者を10人以上となる。	・県外生徒の学校での活動の様子をHP等で紹介するとともに、広報誌等を県外出身中学が閲覧できるようにする。 ・魅力化発信のため県内の中学校への体験入学、オープンスクールのPRを積極的に行う。	・地域みらい留学オンライン説明会5回(6月、7月、8月、9月、10月)実施。対面合同説明会1回(9月:東京)に参加。2日間のイベント参加は500名を超えた。また、体験入学、オープンスクールなどには10名以上の参加があり昨年より増加傾向にある。 ・県外生徒に対して、週末の過ごし方に工夫を加え、地域の農業団体での研修機会を設定し、農業体験を実施したり、販売実習を行うなどした。	B	適宜、個別対応をしていく。
5	学校業務改善に向けての取組	長時間勤務の解消	・昨年度に比べ時間外勤務は多く削減できている。しかし、新型コロナウイルス感染症が5類へ移行する今年度は大会なども元に戻るため増加しつつある。	・週休日振替、代休の徹底 ・昨年度並みの時間外労働時間になっている。	・週休日、祝日に業務がある場合、出張伺提出前に週休日振替、代休申請を徹底する。 ・衛生委員会で協議し、職員会議で実態報告。変形勤務の活用推進。及びリフレックス週、帰らーdayの呼びかけの徹底。	B	・出張伺提出前の振替が昨年より徹底できている。 ・衛生委員会の報告を職員会議で行い、職員の勤務実態を知っていただくことで職員全体で協力できるようになってきた。	職員への声かけの徹底。 学科、分掌内での協力体制の構築

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し
 [100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [20%程度]